

# ビスフォスフォネート系薬剤の 投与を受けている患者さんの顎骨壊死

九州大学大学院歯学研究院口腔顎顔面病態学講座  
(九州大学病院顎顔面口腔外科)

中村 誠司

ビスフォスフォネート(以下BP)は石灰化抑制作用を有する生体内物質であるピロリン酸のP-O-P構造を、安定なP-C-P構造に変えたものの総称です。そのため、BP系薬剤は高い骨吸収抑制作用を有し、骨吸収亢進を呈する様々な骨代謝疾患において有用性が報告されています。その代表的疾患が骨粗鬆症ですが、国内外のガイドラインで骨粗鬆症治療の第一選択薬となっています。また、悪性腫瘍による高カルシウム血症、固形癌の骨転移、多発性骨髄腫においても、骨痛や骨折などの合併症の抑制に有効と報告されており、国内外のガイドラインで推奨される癌の支持療法となっています。

近年、BP系薬剤の副作用のひとつとして顎骨壊死が報告され、どのように対応するかが問題になっています。現時点では、BP系薬剤による顎骨壊死については発症機序が明確ではなく、予防法や対処方法も確立されてはいません。そのため、医師や歯科医師の間で不安感が広がっているのが現状です。BP系薬剤による顎骨壊死は一旦発症すると極めて難治性であり、最悪の場合には顎骨を失ってしまうこともありますので、発症させないことが第一です。多くの場合がBP系薬剤の投与中に抜歯を行った後に発症していることから、医師、歯科医師、薬剤師が的確な連携を図り、適切に対応することが求められています。

このように、BP系薬剤による顎骨壊死を予防する、惹起しない、そして不幸にして発症した場合には適切に治療・管理することが必要ですので、日本でも対応のガイドラインが作成されました。さらに最近では、発症早期に適切な対応を行えば完全に治癒させることも可能であることが判ってきました。今回の講演では、BP系薬剤に関連する顎骨壊死に関わる最新情報をお知らせしようと思います。今回の私の講演が、BP系薬剤による顎骨壊死に関する理解を深める一助となれば幸いです。